

「新映像時代を豊かに彩る商品開発」

株式会社ニコン 執行役員 映像カンパニー統括部長兼第一設計部長 後藤哲朗氏

（究極のアナログカメラと言われている）ニコンF6の開発をスタートした時には、世の中はデジタルの方向にどんどん向かっていましたから、こんなことをやっていいかなというのが大きな論議でした。だから、お金をかけないで、人をそれほどかけないで、その代わり時間をかけてやろうじゃないかということになった。ですから（デジタルカメラの）D2X、D2Hとほとんど同じ要素技術を使っておりますが、D2X、D2Hよりも早めに開発に着手しています。4年くらいかかっています。D2X、D2Hは、その4年間で生まれた要素技術を導入してデジタルカメラとして先に市場に出たわけです。

開発中も論議が続きました。そんなことをやっているのであれば一台でも余計にデジタルカメラをだせば？と言うのです。それでも営業からの意見も総合し、世の中にそういうものを求める人がたくさんいる。中古市場を見よう。こんなに使う人たちがいるじゃないか。そんな風に説得をしながら進めました。お陰さまで結果は好評でしてカメラ屋さんでも喜ばれています。開発費用が結構かかっていますので回収するためにはもう少し時間がかかるだろうと思います。ブランドイメージを上げる大きな力になっておりますからその点ではよかったと思います。

（100万台を突破したデジタル一眼レフカメラの）D70はもともとあの値段であのサイズであの性能で出そうと思っておりました。同時、というよりも少し早めに同じゾーンを狙ってキャノンのデジタル一眼レフカメラが発売されました。幸いにしてスイッチを入れてから3秒たたないと電源が立ち上がらない、シャッター・ボタンを押してからシャッターが切れるまでのタイムラグが気になるという問題があり、D70はその点を克服しておりましたのですぐに逆転に成功しました。その後、3Qぐらいは優位性を保っておりましたが、キャノンがほぼ同等のスピードのKISSデジタルμを8メガ（800万画素）で出してきました。

画素競争（解像度）ではないと個人的に思っています。6メガよりは8メガに、8メガよりも10メガに、と普通の方はお思いでしょうし、売り場でもそれを言えばその場で選んでいただけるでしょう。しかしセンサーというのは、セルのサイズの一個一個が大きいほうが有利なのです。信号がちゃんとセルの中に入り切るかどうか。それによって諧調写真にして見たときの深みが違ってくるのです。もちろん解像度が高い方がパソコン画面で拡大して比べられると優れて見えます。しかし鑑賞しようという時には大切なのは深みであって必ずしも解像度だけではないという信念をニコンはもっています。